小学校教育相談　　**広島市立観音小学校養護教諭　泊野亜紀子**

1　研究主題

保健室における共感的理解を深める教育相談に関する研究

―「支援シート」による子どもとの対話を通して―

(1)　研究主題設定の理由

保健室に訪れる子どもたちの中には，緊張・不安・不満などの心理的要因を，頭痛・腹痛・気分不良などの身体症状として訴えることが多い。そして，このような身体的不調を訴える子どもたちの背景には，心の寄りどころを求めて来室してくる場合が多い。しかし，そのような子どもたちは，自らの健康状態に対して，どうしてそのような状態になっているのかが，漠然としていたり，気付いていなかったりするなど，自分の思いをうまく伝えられない傾向にある。

このような現状を踏まえ，自らの保健室での日頃の執務を振り返ると，一人一人の子どもたちの身体症状の訴えの背景にあるものを見取り，心の内を引きだせるような健康相談活動が十分とは言えなかった。

さらに，頻繁に来室する子どもの長期的，継続的な対応を行う場面において，子どもの思いや考えに対する理解が十分でないうちに，独断的に決めつけて対応してしまったり，全く別の思いや考えをもって来室することがあった場合でも，先入観や慣れによる対応をしてしまったりすることがあった。また，一度にたくさんの子どもたちが来室して忙しい時など，自分自身の心のゆとりがなくなり，子どもの気持ちに寄り添った対応をすることができないこともあった。

そこで，教育相談の基本に立ち返り，子どもの気持ちを受容し，子どもと同じ立場に立ち，子どもの感情を理解していくことで，子どもに対する共感的理解を深め，共感的な人間関係を育みながら，子どもの心の内が引き出せるような効果的な教育相談の方法について研究を進めていきたいと考えた。

(2)　研究主題に関する基礎的研究

ア　養護教諭の行う健康相談活動(ヘルスカウンセリング)

健康相談活動を行う際，子どもの訴えの背景にあるものを見取る力が大切になる。そのためには健康相談活動の充実を図り，養護教諭の資質の向上が求められていると，平成９年９月に出された保健体育審議会答申で述べられている。

> 「養護教諭の新たな役割」
>
> 養護教諭の行うヘルスカウンセリングは，養護教諭の職務の特質や保健室の機能を十分に生かし，児童生徒の様々な訴えに対して，常に心的な要因や背景を念頭に置いて，心身の観察，問題の背景の分析，解決のための支援，関係者との連携など，心や体の両面への対応を行う健康相談活動である。［一部抜粋］

> 「求められる資質」
>
> ①保健室を訪れた児童生徒に接した時に必要な「心の健康問題と身体症状」に関する知識理解，これらの観察の仕方や受け止め方等についての確かな判断力と対応力（カウンセリング能力）
>
> ②健康に関する現代的課題の解決のために個人又は集団の児童生徒の情報を収集し，健康課題をとらえる力量や解決のための指導力［一部抜粋］

イ　健康相談活動における共感的理解の考え方

保健体育審議会答申や，現在の子どもの実態などから考えると，近年の心の健康問題等の深刻化に伴い，学校におけるカウンセリング等の機能の充実を図る必要が一層ある。そのためには，子どもの気持ちを十分に理解し受容することが大切である。その際，子どもが自分の思いや考えを表出できるような養護教諭としての資質が重要なポイントとなる。

そこで，養護教諭の行う健康相談活動においては，子どもの身体的不調の訴えを緩和し，子どもの思い

や考えに対する理解を十分に行うことで，心身の状態や生活環境，興味や関心のあることなどの情報を収集し，子どもの立場や視点に立った見取り方や考え方を行っていくなどの，共感的理解を深める健康相談活動の在り方が問われてくる(図１)。

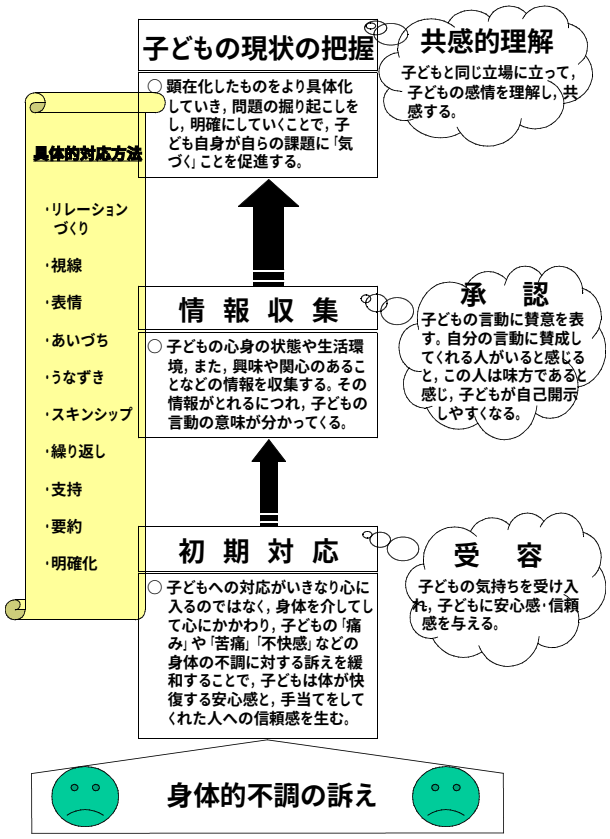

図１　共感的理解を深める健康相談活動

２　「支援シート」の必要性

共感的理解を深めるためには，常に，子どもが身体的不調を訴える背景にある状況の程度，それにかかわる因果関係，時間的な流れなどの背景を把握しながら，子どもとの対話を通して情報収集をする必要がある。そして，それらを記憶に留めるだけでなく文章として記録に残し，分析・考察，自己評価をし，次回の支援目標や計画の明確化を図る，という過程を繰り返すことを可能にするような「支援シート」を開発し，これを活用することで，子どもが自分の思いや考えなどを表出することが可能になると考えた(図２)。

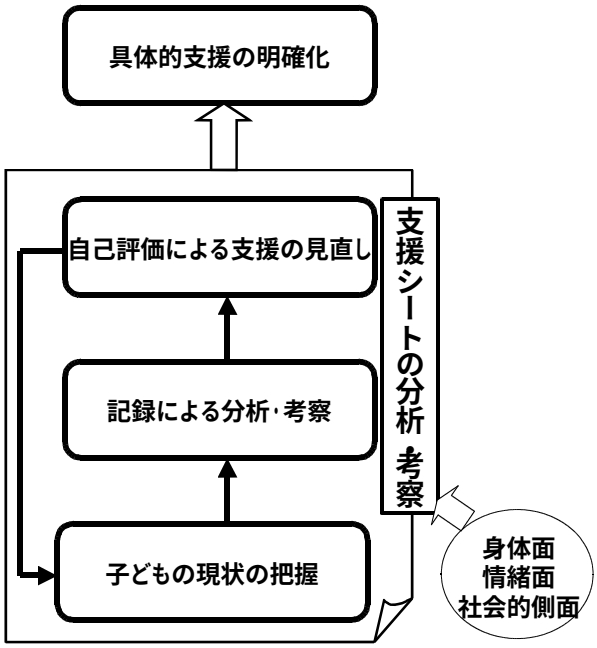

図２　共感的理解を深めるための「支援シート」の構想

３　共感的理解を深める支援シートの項目

支援シートの項目として，次のような内容を考えた。

(1)　子どもの現状の把握

支援シートには，子どもの身体症状の訴えに関する内容と，子どもの現状の把握に必要と思われる内容を明らかにするために，次のような項目を設けた。

来室時の状況(主訴・第一声・姿勢・表情・顔色など)，バイタルチェック，学校での様子や家庭での様子，子どもとのかかわりの様子，自己評価，次回来室時の支援方法，その他

(2)　記録による分析・考察

子どもとの会話や態度，行動，雰囲気など「いつもと様子が違う」「気になる」と感じたことを記録し，それを分析・考察することによって，子どもの現在の状況を把握する(図３－①)。

(3)　自己評価による支援の見直し

記録によって明らかになった自らの思考傾向や支援方法に気づき，子どもへの対応を見直していくことで，効果的な支援方法を探る(図３－②)。

(4)　具体的支援の明確化

(3)までの過程を基に，今後の支援における中心的な課題や，その日に解決できず，次回へ繰り越し

た問題の支援目標・計画を立て，子どもの身体的不調を訴える背景に抱えている思いや考えを見取り，養護教諭自身の考え方，感じ方を見直すことで，子どもに対する対応の偏りをなくし，常に新しい支援方法を基に，子どもの心に寄り添っていく(図３－③)。

(5)　本人以外から得た情報

担任や保護者との連携など，必要に応じてその内容を記入する(図３－④)。

図３　支援シート

４　支援シートを活用した支援の実際と結果の分析

本研究では，３年生児童Ａに焦点を当てて研究を進めた。児童Ａは，毎日のように，身体の不調を訴えて保健室に来室している。そして，いつも表情は硬く，養護教諭が話しかけても，なかなか言葉で自分の状態を伝えることができない情況がみられた。そこで，児童Ａが，心の内を引き出すことができるように，支援シートを活用した健康相談活動を実践し，その際の会話記録と支援シートへの記述等を基に，支援シートの有効性を探った。

(1)　実践場面１

	会　話　記　録 (　　児童Ａの動作，〰〰〰児童Ａの発言)
1	Ａ：(黙って保健室に入ってくる。)
2	Ｙ：あー，おはよう。どんな？Ａさんは？
3	Ａ：(そのまま何も言わず，保健室のソファーの肘当てのところに座る。)
4	Ｙ：どんなですか？
5	Ａ：首を横に振る
6	Ｙ：どういう意味？
7	Ａ：首を横に振る
8	Ｙ：どういう意味なのかな？
9	Ａ：首を横に振る
10	Ｙ：調子が良くないっていう意味？
11	Ａ：うなずく
12	Ｙ：調子が良くないの？
13	Ａ：うなずく
14	Ｙ：しんどいん？
15	Ａ：うなずく
16	Ｙ：頭が痛いん？
17	Ａ：うなずく
18	Ｙ：そう。
19	Ａ：うなずく
20	Ｙ：お腹は？
21	Ａ：首を横に振る
22	Ｙ：お腹は大丈夫？じゃぁ，お熱測ってみる？
23	Ａ：うなずく
24	Ａ：(養護教諭が体温計を取りに行っている間，クリスマスの飾りを見ている。)
25	Ｙ：(体温計を渡す。)
26	Ｙ：寒くない？
27	Ａ：うなずく
28	Ｙ：今日は朝ご飯食べてきた？
29	Ａ：首を横に振る
30	Ｙ：食べんかったん？忙しかった？ 他の子どもが来室。 Ｙ：(来室児童に）おはよう。
31	Ｙ：朝起きるのが遅かったん？
32	〰〰Ａ：うーん〰〰
33	体温計が鳴る。
34	Ｙ：６度８分。
35	Ａ：ゴホッ，ゴホッ。 チャイムが鳴る。 （中略） Ｙ：(他の児童への対応。)
40	Ａ：(こちらを見ながら教室へ帰る。)

児童Ａとのかかわりを振り返ってみると，自分自身がどのような視点に立って子ども理解をしていくのか，といった意識が低いため，児童Ａに話しかけて返ってくる反応の多くが，首を振ったり，うなずいたりといった表現で，言葉での表現は「うーん」(32)の一言だけだった。これまでにも，何度か子ど

もに対応しながら支援シートによる記録を残していったが，次回来室時の支援重点と具体的な方法の欄に「保健室にやすらぎの場を求めて来室しているようなので，しばらく見守ってみる」(図４)といったような抽象的な支援方法しか記入することができないことが多く，子どもの内面を見取るかかわりが十分にできていなかったと考える。そこで，支援シートを有効に活用するためには，支援シートの内容と記入方法について，工夫する必要があると考えた。

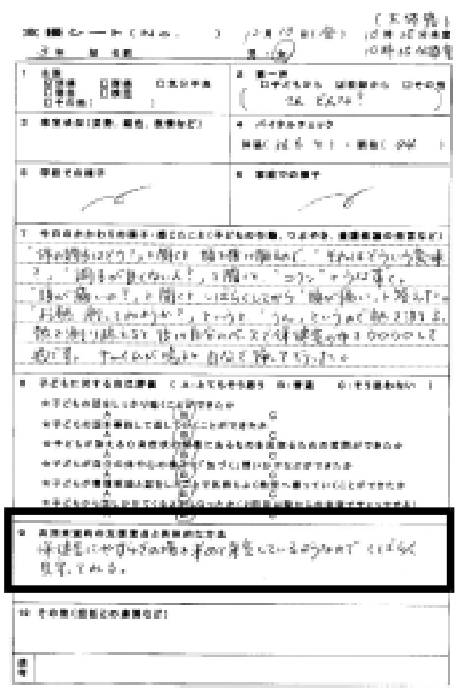

図４　実践場面１で記入した支援シート

(2)　支援シートの改善

前回までの児童Ａ及び他の子どもとのかかわりから，支援シートが，より子どもの内面を見取るための手立てとなるように改善を図った。まず，子どもが身体的不調を訴える原因と思われる内容をいくつか挙げた。そして，それに照らし合わせながら，支援の方法を具体的に計画していくことで，次回の来室時の対応方法をより明確にすることとした。具体的には，愛情不足(養護教諭に甘える，かかわりを求める)，情緒不安定(沈んだ表情，元気がない，無口など)，過剰な感情表現(喜び，怒り，不満などの感情をぶつけてくる)，生活習慣などに関する知識や情報の不足(食生活や睡眠，身体に対して関心がない)，不安・緊張(落ち着かない，イライラする，頭痛・腹痛などを訴える)，その他の６つに分類した。また，子どもに対する自己評価の欄についても，３段階の評価では，子どもの内を引き出せたかどうか，自分自身の対応を見直す上で曖昧であると感じ，５段階の評価にして，子どもの変化等に気づきやすくすることとした。図５はその改善シートである。

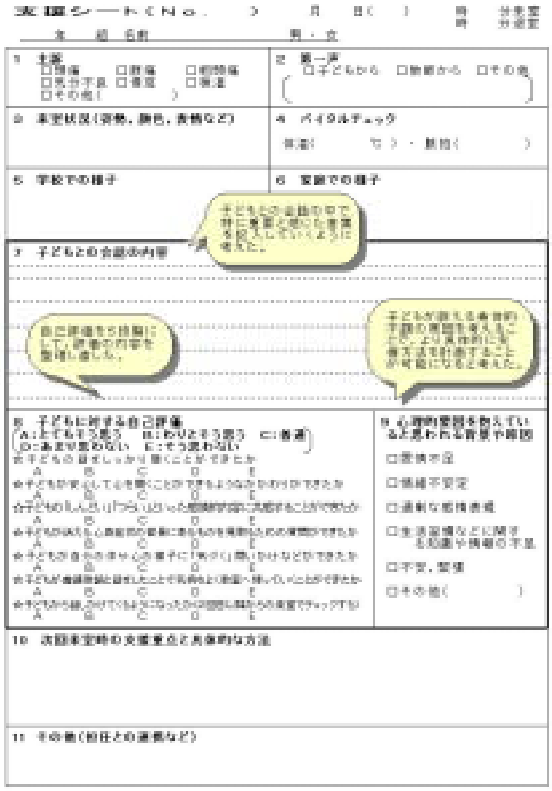

図５　支援シートの改善

(3)　実践場面２

	会　話　記　録 (　　児童Ａの動作，〰〰　児童Ａの発言)
	黙って保健室に入ってきて，しばらく保健室の入り口に立っている。休憩時間終了のチャイムが鳴ったので，養護教諭の姿を探すが，他の児童の対応に追われていたため，ビデオカメラの近くでウロウロしている。
1	Ｙ：あら，Ａさん。(他の児童に対応しながら) 寒いけど外で体育見学してたんだね。
2	Ａ：首を横に振る
3	Ｙ：えっ，違う？２時間目体育じゃなかった？
4	Ａ：体育見学してない。
5	Ｙ：あれ？体育してたの？あぁ，ほんと。
6	Ｙ：Ａさんはどうしたん？しんどい？

7	A：喉が痛い・・・・・
8	Y：喉が痛いん？お熱測ってみる？
9	A：うなずく
	Y：(他の児童の対応。)
10	Y：Aさんは喉が痛いんよね？
11	A：うーんん
12	Y：ずっと風邪ひいてるの？
13	A：うなずく
14	Y：休憩時間はどうしてたの？
15	A：着替えてたん
16	Y：あ，教室で着替えてたんだ。
17	Y：先生に言ってある？言ってない？誰かには？
18	A：首を横に振る
19	Y：頼んでない？
20	A：うなずく
21	Y：あぁ，ほんとぉ。
22	A：うんん
	(中略)
39	Y：うんうん。もし，どうしてもしんどかったら，またおいでね。無理しないようにね。じゃあ，行っておいで。

この日は，大休憩終了間際で，さらに同時に３人の対応をしていたため，児童Aに対してゆっくり話をすることができず，身体的な訴えに対しても，簡単に触れただけで十分な対応ができなかった。しかし，児童Aが体調不良の為，縄跳びをしていなかったことや，児童Aが保健室に来室し，養護教諭に話しかけることができずウロウロしていたりしていたことなどから，支援シートの心理的要因を抱えていると思われる背景や原因の欄の「情緒不安定」「不安，緊張」の二つにチェックをした(図６－①)。また，普段の児童Aは，話の声も小さく，あまり表情がなく，目線がなかなか合わないが，以前父親と一緒にいる姿を見かけたときには，とてもよい表情をしていた。これまでのかかわりの中で，本人から父親が単身赴任だと言っていたこともあり，元気がなかったり，体調が思わしくないことが，児童Aの心理的要因の背景や原因になっているのではないかと考え，以前支援シートに書き留めていた父親とのことについて聞いてみることを支援の一つの方法として考えた(図６－②)。

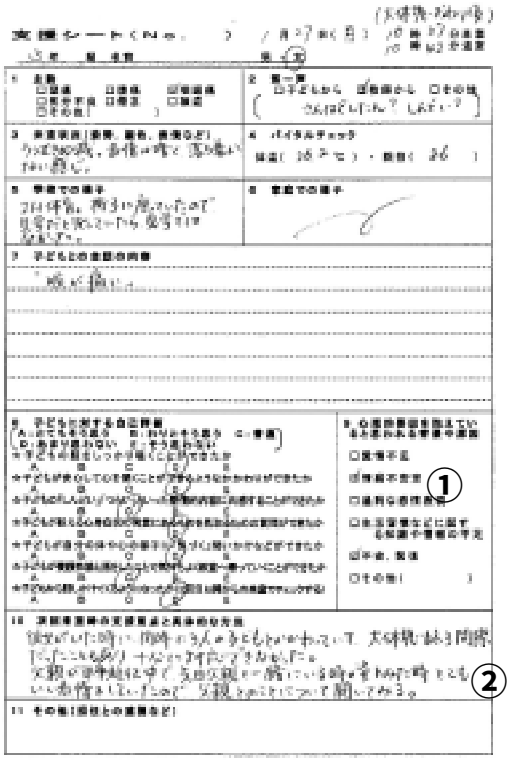

図６　実践場面２で記入した支援シート

(4)　実践場面３

	会　話　記　録 (　児童Aの動作，　児童Aの発言)
	黙って保健室に入ってくる。養護教諭が他の児童の対応をしていたので，椅子に座って待っている。
1	Y：まだ喉が痛いん？うがいした？
2	A：首を横に振る
3	Y：どうする？お熱測ってみる？
4	A：うなずく。
	(養護教諭に手を引かれながら一緒にソファーに座る。)
5	Y：給食食べられた？
6	A：うんん
7	Y：全部食べられた？
8	A：うなずく
9	Y：父さんまた行っとるん？出張に？
10	A：うんん
11	Y：この間，とんどのときにお父さんと一緒にいたでしょ？
12	A：うんん
13	Y：あのときは休みじゃったん？
14	A：うんん
15	Y：そう。
16	A：単身赴任なんよ
17	Y：単身赴任なん？そう。
18	Y：じゃあ，お父さんは単身赴任のところに住んでるわけ？
19	A：ううん。アパートに住んどる。あと１週間くらい

	したら帰ってくる。
20	Ｙ：あと１週間したら帰ってくるんだ。
21	Ａ：（体温計が鳴ったので養護教諭に渡す。）
22	Ｙ：３６度５分じゃね。
	（中略）
30	Ｙ：お父さんっていつまで単身赴任なん？
31	Ａ：わからん。
32	Ｙ：わからんのん？
33	Ａ：うなずく
34	Ｙ：全然？
35	Ａ：うなずく
36	Ｙ：でも，さみしくない？お父さんおらんかったら？
37	Ａ：（首をかしげながら）さみしくない。
38	Ｙ：ほんまぁ・・・。うーん・・・。
39	Ａ：土日は帰ってくるし。
40	Ｙ：もう慣れた？でもＡさんさぁ，お父さんとこの間とんどで一緒におるとき，いい顔しとったよ。
41	Ａ：（照れる）
42	Ｙ：うん。すごいうれしそうな顔しとったよ。
43	Ａ：（目線をそらす）
44	Ｙ：やっぱ，お父さんがおったほうが楽しいんかなぁって。やさしいじゃろ？お父さん。
45	Ａ：首を横に振る
46	Ｙ：ほんまぁ！？
47	Ａ：怒ったら怖い。
48	Ｙ：あぁ，怒ったら怖いんよ。けど，お父さんと一緒におった時，先生が何回もＡさんコチョコチョってしても，気がつかんかったよ。
	（中略）
63	Ａ：（少し沈黙の後）先生。子どもおる？
64	Ｙ：先生？おるよ。２人。
65	Ａ：何歳？
66	Ｙ：もうちょっとで５歳になる子と，２歳。
67	Ａ：２歳の子が前学校来とった？
68	Ｙ：そうかねぇ，熱がでたときかも知れんね。
69	Ｙ：（手帳に貼ってある子どもの写真を見せながら）ほら。こっちがお兄ちゃんでこっちが妹。
	（中略）
91	Ｙ：（他の児童Ｂの対応。Ｂは養護教諭の隣に座っている。）
92	Ａ：（児童Ｂの話を聞きながら，長机の上でゴロゴロしている。）
93	Ａ：児童Ｂが雪を見に行ったと同時に，養護教諭の横にサッと座る。
94	Ａ：先生。
95	Ｙ：なぁに？
96	Ａ：先生。お父さんねぇ。
97	Ｙ：うん。
98	Ａ：・・・。えっとねぇ・・・。えっとねぇ・・・。大阪にね。
99	Ｙ：うん。
100	Ａ：単身赴任なんよ。
101	Ｙ：そう。大阪なんだ。
	（中略）
110	Ａ：今度名古屋に行くんよ。
111	Ｙ：名古屋まで行ったん？
112	Ａ：ううん。行く。
	Ｙ：（他の児童の対応。）
	チャイムが鳴る。
113	Ｙ：じゃあ，Ａさんも行こうや。５時間目は何の授業かな？
114	Ａ：なにか当てて。
115	Ｙ：うーん。算数！。
116	Ａ：ちがう。
117	Ｙ：国語！。
118	Ａ：当たり。
119	Ｙ：当たり？
	Ｙ：（他の児童の対応）
120	Ａ：（長机のカバーがずれているのを直して，なにも言わずにそのまま教室へ帰る。）

前回の支援の手がかりである父親のことを尋ねると(9)，「さみしくない」とか「土日は帰ってくるし」などのそっけない返事だったが(37,39)，「お父さんとこの間とんどで一緒におるとき，いい顔しとったよ」(40)と話した後，養護教諭の家族のことを尋ねてきたりした(63,65)。また，今までいつもソファーの向かい側に座っていたのに，養護教諭の隣に座っていた児童Ｂが移動したと同時に，初めて隣に座ってきたり(93)，自分から父親のことを話してきたりした(94,96,98,100)。また，次の授業の時間割りを尋ねると，クイズをするように聞き返してきたりした(114~119)。父親の話をきっかけに，児童Ａから養護教諭に対してさまざまな言動や行動の変化が見られた。そして，養護教諭自身も，子どもに対する自己評価に対して「わりとそう思う」という項目に丸印をつけることができている(図７－①)。

さらに，父親のことを尋ねたことをきっかけに，児童Ａが自分の思いを話し出したこともあり，父親とのことを話すことで，養護教諭とのかかわりを求めていると感じ「愛情不足」の項目にチェックをいれた(図７－②)。

ただ，これだけでは，児童Ａが心の内を十分に引き出してくれているとは言えない。また，いつも養護教諭から積極的に声をかけてしまい，児童Ａが自分の思いを話そうとする機会を無くしていると感じ，次回来室時は，養護教諭に対して，どのくらい心を開いてくれているのかを知る手がかりとして，児童Ａから声をかけてくるかどうか待ってみることを重点の支援方法として考えた(図７－③)。

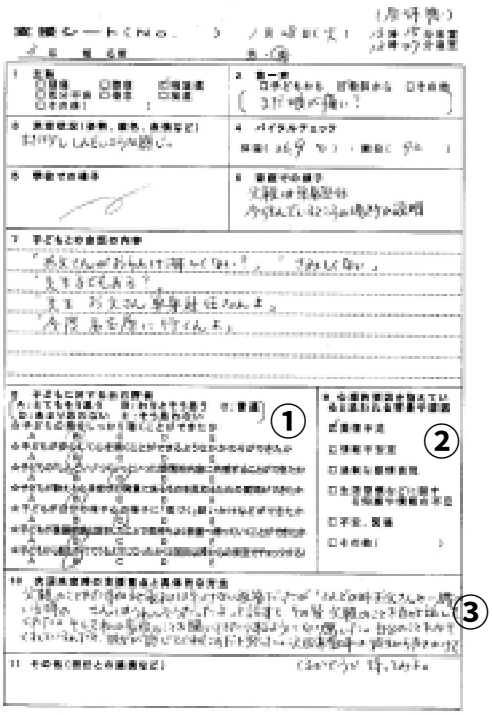

図７　実践場面３で記入した支援シート

(5)　実践場面４

	会　話　記　録 (　児童Ａの動作，～～～～　児童Ａの発言)
1	（手の中に何か握りしめて保健室に来室する。養護教諭に話しかけるタイミングを見ている。）
2	Ａ：先生。手だして。
3	Ｙ：なに？（といって手を出す）
4	Ａ：(雪を手の平に乗せる。)
5	Ｙ：きゃあ，冷たい！！どこでひらったん？ Ｙ：(他の児童の対応。)
6	Ｙ：冷たい。あぁ，冷たい。どこでひらってきたん？その雪。
7	Ａ：マットの上。
8	Ｙ：ん？
9	Ａ：マットの上。
10	Ｙ：マットの上？
11	Ａ：渡り廊下のところの・・・。
12	Ｙ：あぁ，渡り廊下の。
13	Ａ：そこの渡り廊下のところの。
14	Ｙ：あぁ，はいはいはい。
15	Ａ：(他の児童の会話を聞いている。)
16	Ｙ：昨日早く寝たん？何時くらいだったん？
17	Ｃ：１０時くらい。
18	Ｙ：あぁ，でもまだ早いわ。
19	Ａ：先生の子ども何時に寝るん？
20	Ｙ：寝んのんよ。先生のところの子ども。
21	Ａ：布団入っとったら寝るんじゃないん？
22	Ｙ：そうじゃね。でも，布団入ってもなかなか寝んのんよ。
23	Ａ：わたし，布団に入って遊びょうる。
24	Ｙ：遊びょうるんじゃ。
25	Ｙ：（Ｃさんの脈を測りながら）自分の脈分かる？
26	Ａ：(自分もマネをして脈を測っている。)
27	Ｙ：（Ａさんの脈を測ってあげる。） （中略） チャイムが鳴る。
42	Ａ：(腕にしがみついて）じゃあね。
43	Ｙ：じゃあね。いってらっしゃい。

前回の支援重点の目標で児童Ａから声をかけてくるかどうか様子をみていた。養護教諭が他の子どもの対応をしていたため，児童Ａは養護教諭に話しかけるタイミングをみていた(１)。こちらも，児童Ａの姿は見えていたが，意識して声はかけず，児童Ａの行動を見守ってみると，他の子どもの対応が終わると同時に，児童Ａから声をかけてきた。また，今回の来室はとても表情がよく，身体的不調を訴えなかったことと，いつもは保健室から帰るとき，他の子どもに対応している養護教諭の様子を見て，児童Ａは声をかけずにそのまま退室してしまうことが多く，なかなか児童Ａの帰る姿を見届けることができなかったが，児童Ａから腕にしがみついて，「じゃあね」といって退室した(42)。

支援シートに子どもとのかかわりの中から把握したことを記録・整理し，児童Ａへの支援重点を明確にしながら対応を繰り返していったことで，児童Ａとの対話が深まり，回数を重ねるごとに児童Ａが心の内を開いてきた。そして，養護教諭自身も子どもに対する自己評価の欄の「子どもが養護教諭と話をしたことで気持ちよく教室に帰っていくことができたか」「子どもから話しかけてくるようになったか」という項目に対して，「とてもそう思う」に丸印をつけることができた(図８－①)。また，いつも一人で保健室に来室するので，クラスでの友人関係について，聞いてみることを支援の重点の方法として考えた(図８－②)。

しかし，これまでの対応で児童Ａとの対話は成立しつつあるが，心理的な背景となる思いや考えの相談には至っていない。その原因としては，児童Ａに関する情報が，養護教諭と児童Ａとの対話の中でしか収集できておらず，あくまでも養護教諭の推察にとどまっていることが挙げられる。推察でなくなるためには，担任や他の教職員，また保護者などと連

携していかなければならないことを再認識した。

図８　実践場面４で記入した支援シート

(6)　児童Ａとのかかわりを通して

子どもとのかかわりの様子を支援シートに記録していくことを通して，自分自身の子どもに対する受け止め方やとらえ方を見直し，支援の目標や方法を明確にしながら子どもにかかわっていくことで，先入観や慣れによる対応や，偏った対応が少なくなった。さらに，支援シートによって次回来室時の支援方法を探りながら，子どもが抱えている思いや考えを見取っていくことを繰り返したことで，子どもに対する共感的理解が深まり，児童Ａとの距離間が縮まり，共感的な人間関係が育まれ，子どもの立場や視点に立った見取り方や考え方ができるようになった。

このようなかかわりを通して，最初はあまり表情もなく目線が合うこともほとんどなかった児童Ａが，自分から声をかけてくるようになったり，養護教諭と笑顔で顔を見て話をすることができるようになってきた。

課題としては，常に支援シートの内容を自分自身が意識して，頭に思い浮かべながら子どもにかかわっていかなければならず，慣れるまでは支援シートの記述が困難であったということ，さらに，子どもとの会話の内容を，ただ書き留めただけでは分かりにくいので，その中でも，子どもの心の動きがわかる言動を要約して記述していく必要があると同時に，養護教諭の観察の仕方や，受け止め方等の確かな判断力と対応力が求められると感じた。

５　研究のまとめ

本研究で，子どもとのかかわりの内容を支援シートに記録していくことで，自分自身を振り返り，子どもがどんな思いや考えを心の内に抱いているのか，さまざまな視点に立った見取りができ，具体的支援方法を考えていくことで，子どもの内面に迫った対話を行うことができた。また，健康相談活動の中で把握した情報を，忘れないうちに整理し，現在までの状況を考えながら支援方法の見直しができたことで，支援シートが有効に機能しながら子どもに対する共感的理解が深まり，子どもとの対話がより深まったと感じた。しかし，子どもが身体的不調を訴えて頻繁に来室してくる場合，どのような思いや考えを抱いているのかを見極め，判断する自分自身の力量不足を改めて痛感した。養護教諭として，常に，子どもの心を柔軟に感じ取り，小さな変化も見逃さないように，自分自身のアンテナをしっかり張り巡らせておくことの重要性も感じた。

今後は，児童Ａだけでなく身体的不調を訴えて来室してくる子どもの中で，自分の思いや考えをうまく伝えられない子どもたちに対しても活用できるように工夫・改善し，この支援シートを通して子どもとの対話が深まり，さらに，担任や保護者，関係機関との連携の際に活用できるようなものにしていきたい。

参考文献

① 国分康孝（編集代表）坂本洋子　金沢吉展　門田美恵子『保健室からのカウンセリング－考え方と進め方－』　図書文化　1998

② 森田光子　三木とみ子（編集代表）『健康相談活動の理論と方法』　ぎょうせい　2000

③ 養護教諭の相談を学ぶ会 編集『養護教諭の相談的対応』　学事出版　1993